

追悼

## 人間学研究室室長、鈴木康之教授を偲ぶ

岩佐 信道

鈴木康之さんとは、彼が麗澤高校に入学した時からの縁であった。私が高校の三年の時、同じ部屋に一年生として入ってきたのが鈴木君である。同じ寮には、上級生をしのぐ優秀な新生が多く、鈴木君もその一人であった。年齢に多少の違いがあるとはいえ、大学、大学院を卒業後は、学祖、廣池千九郎の残したモラロジの学問的前進のために何かしたい、との気持ちをもって、共に当時の研究部に奉職することになった。その後も、大学で教鞭をとりながら、研究センターの研究員を兼務するという同じような経歴をたどり、公私ともに、大変お世話になった。私ごとではあるが、子どもも、たまたま四人目までは、年齢・性別ともに同じであった。ところが、鈴木家には五人目のお子さんができたことを知った時、私は「参りました」と脱帽したものである。そのお子さんたちも、立派に成長された。

研究センターの人間学研究室室長であった鈴木康之教授は、すべての物事に誠実に、そして着実に取り組む性格で、私も、大いに学ばなければならぬと思っていた。聖人研究プロジェクトの責任者として、四大

聖人に関する研究会や講演会の企画、実施に当たり、また公開講演会なども着々と実施されていた。そうした講演会の手順や仕事の分担なども、プログラムにしたがってきめ細かく決められていた。外部からの講師をお迎えしたような場合には、「講師への謝礼（センター長）」などと、役割を明記した書類が回ってきたもので、全体と自分のやるべきことが一目瞭然であった。あるとき、そうした書類が、外部からの講師の目にとまり、鈴木室長のきめの細かい準備に驚かれたことを思い出す。

また、研究室の書棚には、分野別にタイトルのついたおびただしい数のファイルが並んでいた。いずれ具体的な形になることが期待されていただけに、しばらくは、主のいなくなったファイルが寂しさを訴えているようにも思えた。それらは、長年にわたる鈴木教授の研究成果の蓄積であった。ただ、いかに緻密に整理されたデータとはいえ、それぞれのデータのもつ意味や全体の中での位置づけは、それを作成した者でなければ把握がむづかしいことを考えれば、その早すぎる逝去があまりにも残念である。

道徳科学研究センターの研究会では、いつも、正面に向かって左側中央近くに陣取って、それぞれの発表に耳を傾け、毎回、モラロジーの観点から本質にかかわるような深い質問を発していた。特に体調を崩した後も、周囲の「無理をしない方がいいのでは……」との心配をよそに、相変わらず、真剣に発表に耳を傾け、ポイントを突いた質問を繰り返して出し、若い研究者には適切なコメントを与えていた。その鈴木教授が、今はなく、いつもの定席から、味わい深い質問が発せられることがなくなったことは、研究センターとしては誠に寂しく、元氣であった頃の鈴木室長がしのばれる。

鈴木教授のモラロジーに対するまじめな姿勢は、研究部、理論研究室のメンバーであったころから顕著であった。そして、そのモラロジーについての理解も、彼の研究の進展とともに変わっていったことを思い出

す。かなり以前のことであるが、ある研究会における私の発表に対して、彼は、次のような観点から発言した。それは、廣池千九郎博士がモラロジーを確立しようとした意図は、道徳的因果律の証明、すなわち、道徳の実行は、その人自身の幸福につながるということを学問的に明らかにすることによって、人々に道徳の実行を奨励することであった、という考え方である。確かに、『道徳科学の論文』には、モラロジーに関して、そのような意図を述べたところがある。これが当時の鈴木教授のモラロジー理解の重要な部分を占めていたように思われた。

しかし、その後、鈴木教授のこのようなモラロジーに関する受け止め方が大きく変わったことを知った。それは、モラロジー研究所の生涯学習講座の一環として開かれていた「原典研究講座Aコース」の講師として、鈴木教授と同じチームに属し、鈴木講師の講義を聴く機会に恵まれた時のことであった。鈴木講師は、講師陣の中でも比較的若かったこともあり、『道徳科学の論文』第一四章の最初の部分、つまり第一項からの数項は、ほとんどの場合、鈴木講師の担当であった。

この『道徳科学の論文』の第一四章は、最高道徳の原理、実質、内容を論じる最も重要な章で、その第一項は、「最高道徳の淵源およびその最高道徳における自己保存の意味」と題されている。鈴木講師がこのコースの冒頭部分の講義において常に力を入れていたのは、彼が、道徳の実行における「先払い」と「後払い」と表現した二つの考え方の違いであった。彼が担当したテキストの範囲には、これ以外にも、講義で取り上げるべき内容があるように思われたが、彼は、自分の持ち時間の大半を使って、この点を集中的にとりあげていた。同僚講師として教室の後ろで鈴木講師の講義を聞いていた私は、道徳の実行における「先払い」と「後払い」ということ、すなわち道徳実行における積極的な動機と消極的な動機の区別が彼にとって

どれほど大きな意味をもっていたかを理解できたのである。そして、これは、モラロジーとは、道德実行の因果律を明らかにする学問であるという以前の理解が、最高道德実行の動機という観点から、大きく転換したことを物語っていた。また、これは、モラロジーに関する彼自身の理解の変化を示しているだけでなく、共にモラロジーの研究に取り組んでいる講座の受講者にも、このような考え方の違いに気づいてほしいという彼の願いがこめられていたのだと思う。

彼は、黒板全体を使って、この区別を説明した。まず、モラロジーの研究者の中には、次のような考え方があってではないかと問題提起する。人生において重要なのは、幸福の実現であるが、多くの人は、道德をないがしろにして幸福を直接手に入れようとしている。しかしそれは間違いで、幸福を確実に手に入れるには、まず道德を実行することが必要である。そうすれば、その品性が向上し、道德実行の程度に応じて幸福は自然に得られる、という考え方である。鈴木教授は、このようなモラロジーにおける通常の考えを「先払い」の道德と呼んだのである。「人様の役に立つことをさせてもらおう」、「自分が犠牲を払わせてもらおう」というような低い姿勢も、この部類の道德に属するという。受講生の中には、それこそ自分の現在の考え方だ、という顔で講義に耳を傾けている人も多かったように思う。鈴木教授は、このような「先払い」の道德の考え方を黒板の半分を使って説明した後で、この考え方は、道德の半面にすぎないと強調する。そして、黒板の残り半分は、これとの対比において「後払い」の道德の説明に使われるのである。

教授によれば、「後払い」の道德は、「先払い」の道德と対照的な人間観、道德観である。自分が人のために率先してよいことをし、ある意味で犠牲になっておけば、結果は求めなくともよい。きっと後からついてくるであろうという「先払い」の道德に対して、自分は既に人様や社会から大きな恩恵を受けている。多く

のものをいただいている。にもかかわらず、自分はまだ何のお返しもししていない。遅ればせながら、お返しに何かさせてもらわなければいけない、と気づいて行動を起こすとすれば、それは「後払い」の道德になるというのである。

モラロジを研究し、人生に生かそうとしている人々の間では、「人生で真の幸福をつかむためには、自ら進んで犠牲を払うことが大切である。」「善因善果、悪因悪果といわれるように、良い種まきをしておけば、後でよい収穫が期待できる」というような言葉が交わされることが少なくない。何らよい種をまかないでいて、よい結果を手に入れようとする考え方に比べて、「進んで良いことをさせてもらおう」という「先払い」の考え方は高く評価されるべきで、決して非難されるべきことではないかもしれない。しかし、よく考えてみれば、気がついた時には、既に多くの人々や社会の大きな恩恵を受けて今日まで生活してきた、というのである。このような「後払い」の考え方こそは、「先払い」の考え方に比べ、人生をはるかに広く、深く見つめているといえよう。講座受講生の感想の中には、「鈴木講師の懇切丁寧な説明のお陰で目の鱗が落ちた」といった感想が多く見られた。

このような鈴木教授の「先払い」の道德と「後払い」の道德のわかりやすい説明は、人間学研究室室長として、専門である宗教学における深い人間観の基礎の上に可能なことであったと思う。麗澤に学び、研究センターの室長としてモラロジを探索し続けた鈴木教授の真摯な姿勢は、こうした講座の受講を通じて教授とふれあうことのできた多くのモラロジアンの中に永く生き続けることであろう。